

突貫紀行

幸田露伴

青空文庫

身には疾やまいあり、胸には愁うれいあり、悪因縁あくいんねんは逐おえども去らず、未
 来に樂よろこしき到着点とうちやくてんの認めらるるなく、目前に痛しげきぶつき刺激物あ
 り、慾よくあれども錢なく、望みあれども縁遠えんし、よし突貫してこの
 逆境いを出でむと決したり。五六枚の衣を売り、一行李こうりの書を典し、
 我を愛する人二三にのみ別わかれをつげて忽然こつぜん出発す。時まさに明治
 二十年八月二十五日午前九時なり。桃内ももないを過ぐる頃ころ、馬上にて、

きていたるものまで脱ぬいで売りはてぬ

いで試みむはだか道中

おたる
小樽に名高きキトに宿りて、夜涼やりように乘じ市街を散歩するに、

たなばたまつり

七夕祭とやらにて人々おのおの自己おのが故郷の風ふうに従い、さま

おおあんどろ

ざまの形なしたる大行燈小行燈に火を点じ歌い囃はやして巷閭こうりよを

ひきま

まちはばいっばい

引廻ひきまわせり。町幅一杯ともいふべき竜宮城りゆうぐうじように擬ぎしたる

おおどうろ

大燈籠の中に幾十いくの火を点ぜるものなど、火光美しく透すきて殊こと

に目ざましく鮮あざやかなりし。

えさしまる

二十六日、

枝幸丸

というに乗りて薄暮はくぼ岩内港いわないみなとに着きぬ。

きば

この港はかつて騎馬きばにて一遊せし地なれば、我が思う人はありや

なしや、我が面を知れる人もあるなれど、海上煙けむり罩こめて浪なみもお

だやかならず、夜の闇くらきもたよりあしければ、船とどに留まることと

して上陸せず。都鳥に似たる「ごめ」という水禽みずとりのみ、黒み行

く浪の上に暮れ残りて白く見ゆるに、都鳥も忍ばしく、父母すみたもう方、ふりすてて来し方もさすがに思わざるにはあらず。海気は衣を撲つて眠り美ならず、夢魂半夜誰が家をか遶りき。

二十七日正午、舟岩内を発し、午後五時寿都という港に着きぬ。此地はこのあたりにての泊舟の地なれど、地形妙ならず、市街も物淋しく見ゆ。また夜泊す。

二十七日の夜ともいうべき二十八日の夙くに出港せしが、浪風あらく雲乱れて、後には雨さえ加わりたり。福山すなわち松前と往時は云いし城下に暫時碇泊しけるに、北海道には珍らしくもさすがは旧城下だけありて白壁づくりの家など眸に入る。此地には長寿の人他処に比べて多く、女も此地生れなるは品よ

くして色麗うるわしく、心ざま言葉つきも優しき方なるが多きよし、
氣候水土の美なればなるべし。上陸して逍遙しょうようしたきは山々な
れど雨に妨さまたげられて舟を出でず。やがてまた吹き来し強き順風に
乗じて船此地を発し、暮るる頃函館はこだてに着き、直ただちに上陸してこ
の港のキトに宿りぬ。建築けんちく半ばなれども室広く器物清くして待た
遇いぐうあしからず、いと心地よし。

二十九日、市中を散歩するにわずか二年余見ざりしうちに、著
しく家列いえならびもよく道路も美しくなり、大町末広町などおさお
さ東京にも劣おとるべからず。公園のみは寒氣強きところなれば樹木
の勢いもよからで、山水の眺めながはありながら何となく飽あかぬ心地
すれど、一切の便利は備わりありて商家の繁盛はんじょう云いうばかり無

し。客窓の徒然つれづれ なぐさを慰むるよすがにもと眼にあたりしままジグビ
 ー、グランドを、文魁堂ぶんかいどうとやら云える舗みせにて購こうて帰りぬ。午
 後、我がせし狼藉ろうぜきの行為こういのため、憚はばかる筋すぢの人に捕とらえられてさま
 ざまに説諭せつゆを加えられたり。されどもいささか思い定むるよし心
 中にあれば頑がんとして屈くつせず、他の好意をば無になして辞して帰る
 やいなや、直ちに三里ほど隔へだたれる湯の川温泉というに到いたり、し
 こうして封書ふうしょを友人に送り、此地に来れる由よしを報じおきぬ。罪
 あらば罪を得ん、人間の加え得る罪は何かあらん。事を決する元
 来癰ようを截きるがごとし、多少の痛苦は忍ぶべきのみ。此地の温泉は
 今春以来かく大きな旅館なども設けらるるようなりしにて、箱は
 館こたてと相関聯あいかんれんして今後とも盛衰せいすいすべき好位置に在り。眺ちようぼう

望^うのこれと指して云うべきも無けれど、かの市より此地まであるいは海^{かい}浜^{ひん}に沿^そいあるいは田圃^{たんぼ}を過^みぐる路^{みち}の興も無きにはあらず、空氣^{こと}殊に良好なる心地して自然と愉快^{ゆかい}を感じず。林長館といえるに宿りしが客あしらいも輕^{けい}薄^{はく}ならで、いと頼^{たの}もしく思いたり。

三十日、清閑^{せいかん}独り書を読む。

三十一日、微雨^{びう}、いよいよ読書に妙^{みょう}なり。

九月一日、館主と共に近き海岸に到りて鰻魚^{いわし}を漁する態を觀^みる。海浜^{はま}に浜小屋^{はまごや}というもの、東京の長家^{ながや}めきて一列に建てられたるを初めて見たり。

二日、無事。

三日、午後箱館に至りキトに一宿す。

四日、初めて耕海入道と号する紀州の人と知る。よわい齡は五十を超えたるなるべけれどかくしやく矍鑠としてほとんどふくはしやうぐん伏波將軍のきが氣概あり、これより千島ちしまに行かんとなり。

五日、いったん湯の川に帰り、引かえしてまた函館に至りかぐう仮寓を定めぬ。

六日、無事。

七日、せいざ静坐読書。

八日、おなじく。

九日、市中を散歩して此地には居るまじきはずの男に行き逢あたり。何とて父母を捨てるろう流浪せりやと問えば、情婦のためなりと答う。帰後独坐どくざかんがい感慨ひさしこれを久うす。

十日、東京に帰らんと欲すること急なり。されど船にて直航せんには囊のうちゅう中足らずして興うす薄く、陸にて行かば苦くるみ多からんが興はあるべし。囊中不足は同じ事なれど、仙せん台だいにはその人無くば已やまむ在らば我が金を得べき理ことわりある筋あり、かつはいささかにも見聞を広くし経験を得んには陸行にしくなし。ついに決断して青森行きの船出づるに投じ、突とつぜん然此地を後になしぬ。別わかれを訣つげなば妨さまたげ多からむを慮おもんばり、ただわずかに一書を友人に遺のこせるのみ。

十一日午前七時青森に着き、田中某ぼうとを訪う。この行風雅ふうがのためにもあらざれば吟哦ぎんがに首をひねる事もなく、追手を避さけて逃にぐるにもあらざれば駛しきゆう急と足をひきずるのくるしみもなし。されば

まことに弥次郎兵衛の一本立の旅行にて、二本の足をうごかし、三本たらぬ智恵の毛を見聞を広くなすことの功德にて補わむとする、ふざけたことなり。

十二日午前、田中某に一宴を饒せらるるまま、うごきもえせず飲み耽り、ひるいい終わりてたちいでぬ。安方町に善知鳥のむかしを忍び、外の浜に南兵衛のおもかげを思う。浅虫といふところまで村々皆磯辺にて、松風の音、岸波の響のみなり。海の中に「ついたて」めきたる巖あり、その外しるすべきことなし。こみなと小湊にてやどりぬ。このあたりあさのとりいれにて、いそがしむる乙女のなまじいに紅染のゆもじしたるもおかしきに、いとかわゆき小女のかね黒々と染ぬるものもおきも、むかしかたぎの

残れるなるべしとおぼしくて奇^きなり。見るものきくもの味^{あじわ}う者^{もの}ふ
 るもの、みないぶせし。筈^けにもるいいを椎^{しい}の葉のなぞと上品の
 洒落^{しやれ}など云うところにあらず。浅虫にいでゆあるよしなれど、み
 ちなかなければいらすありき、途^{とちゆう}中^{ぼうし}帽子を失いたれど購^{あがな}うべき余^よ
 裕^{ゆう}なければ、洋服には「うつり」あしけれど手^{てぬぐい}拭^{ぬぐ}にて頬^ほ冠^{かぶ}り
 しけるに、犬^ほの吠^{はな}ゆること甚^{はな}しければ自ら無冠^{むかん}の太夫^{たゆう}と洒落ぬ。
 旅宿^{やど}は三浦屋^{みうらや}と云うに定めけるに、衾^{ふすま}は堅^{かた}くして肌^{はだ}に妙ならず、
 戸は風漏^もりて夢^{ゆめ}さめやすし。こし方行末おもい続けてうつらうつ
 らと一夜をあかしぬ。

十三日、明けて糠^{ぬか}くさき飯^いろくにも喰^くわず、脚^{きやはん}半^{はん}はきて走り
 出^でづ。清水川という村よりまたまた野辺^{のべち}地^ちまで海岸なり、野辺地

の本町ほんまちといえるは、御影石みかげいしにやあらん幅はば三尺ばかりなるを三
 四丁の間敷しき連ねたるは、いかなる心か知らねど立派なり。戸数
 は九百ばかりなり。とある家に入りて昼餉ひるげたべけるに羹あつものの内に蕈きのこ
 あり。椎茸しいたけに似て香かおりなく色薄し。されど味のわろからぬまま喰く
 い尽つくしけるに、半里ほど歩むとやがて腹痛むこと大方ならず、涙なみだ
 を浮うかべて道ばたの草を蓐しとねにすれど、路上坐禅ざぜんを学ぶにもあらず、
 かえつて跋提河ばだいがの釈迦しゃかにちかし。一時ひとときばかりにして人より宝ほうた
 丹んを貰もらい受けて心地ようやくたしかになりぬ。おそろしくして
 駄洒落だじゃれもなく七戸しちのへに腰折こしおれてやどりけるに、行燈あんどうの油は山中
 なるに魚油にやあらむ臭くさかりける。ことさら雨ふりいでて、秋の
 夜の旅のあわれもいやまさりければ、

さらぬだに物思ふ秋の夜を長み

いねがてに聞く雨の音かな

食うものいとおかしく、山中なるに魚のなますは蕈のためしも
あれば懼^{おそ}れて手もつけず、椀^{わん}の中のどじょうの五分切りもかたは
ら痛きに、とうふのかたさは芋^{いも}よりとはあまりになさけなかりけ
れば、

塩^{しお}辛^{から}き浮世のさまか七^{しち}の戸^への

ほそきどじょうの五分切りの汁^{しる}

十四日、朝早く立たちて行く間なく雨しとしとふりいでぬ。きぬぎ
 ぬならばやらずの雨とも云うべきに、旅には憂うれきことのかぎりな
 り。三本木もゆめ路にすぎて、五戸ごのへにて昼飯す。この辺牛馬殊に
 多し。名物なれど喰うこともならず、みやげにもならず、うれし
 からぬものなりと思ひながら、三の戸まで何ほどの里みちのり程かと問
 いしに、三里と答えければ、いでや一走りといきせき立たつて進むに、
 峠とうげ一つありて登ることやや長けれども尽つきず、雨はいよいよ強く
 面をあげがたく、足に出来たる「まめ」ついにやぶれて脚折あしるる
 になんなんたり。並木なみきの松もここには始皇をなぐさめえずして、
 ひとりだちの椎はいたずらに藤房ふじふさのかなしみに似たり。隧トンネル道

に一やすみす。この時またみちのりを問うに、さきの答は五十町一里なりけり。とかくして涙ながら三戸につきぬ。床の間に刀掛かけを置けるは何のためなるにや、家づくりいとふるびて興あり。この日はじめて鮭さけを食うにその味美なり。

十五日、朝、雨気ありたれども思いきりて出づ。三の戸、金田一、福岡ふくおかと来りしが、昨日きのうは昼餉ひるげたべはぐりてくるしみければ今日はむすび二ツもらい来つ、いで食わんとするに臨み玉子うる家あり。価を問えば六厘りんと云う。三つばかり買いてなお進み行くに、路傍ろぼうに清水いづるところあり。椀わんさえ添えたるに、こしかけもあり。草を茵しとねとし石を卓たくとして、谿流けいりゅうの縈回えいかいせる、雲うんえ烟んの変化するを見ながら食うもよし、かつ価も廉れんにして妙なり

なぞとよろこびながら、仰い^{あお}で口中に卵を受くるに、臭鼻^{におい}を突き
 味舌^さを刺す。驚^{おどろ}きて吐^はき出すに腐^{くさ}れたるなり。嗽^{くちぞそ}ぎて嗽^{くちぞそ}げども胸
 わろし。この度は水の椀にとりて見るにまたおなじ、次もおなじ。
 これにて二銭種なしとぞなりける。腹はたてども飯ばかり喰いぬ。

鳥^{ちようもく} 目を種なしにした残念さ

うっかり買^{かつ}たくされ卵^{たまご}子に

やす玉子きみもみだれてなぐるめり

知りなば惜^おしき銭をすてむや

これより行く手に名高き浪打峠^{なみうちとうげ}にかかる。末の松山を此地

という説もあり。いずれに行くとも三十里余りを経^へずば海に遇^あうことはなり難かるべし。但^{ただ}し貝の化石は湯田というところよりいづるよしにて処^{ところどころ}々に売る家あり、なかなか価安からず。かくてすすむほどに山路に入りこみて、鬱^{うつそう}蒼^{そう}たる樹、潺^{せんかん}湲^{かん}たる水のほか人にもあわず、しばらく道に坐^ざして人の来るを待ち、一ノ戸まで何ほどあるやと問うに、十五里ばかりと答う。駭^{がいぜん}然^{ぜん}として夢か覚^{うつつ}か狐子^{こし}に騙^{へん}せらるるなからむやと思えども、なお勇氣を奮^{ふる}いてすすむに、答えし男急に呼^よびとめて、いずかたへ行くやと云う。不思議に思いて、一の戸に行くなりと生^{なま}いらえするに、彼^{かれ}笑つて、ああおのし、まようて損したり、福岡の橋を渡^{わた}らねばならずと云う。余ここにおいていよいよ落^{らくたん}胆^{たん}せり。されどそのま

まあるべきにもあらず、日も高ければいそぎて行くに、ふたととき 二時ばかりにして一の戸駅と云えるしるしぐい 標杭にあいぬ。またまたあやしむこと限りなし。ふたたび貝石うる家の前いに出で、価を問うにいと高ければ、いまいましさのあまり、この蛤はまぐり一升天てんぼう保くらいならば一石こくも買うべけれど云え、亭主ていしゅそれは食わむとにやと問う。元よりなりと答う。に煮るかと云うに、いや生なまこそ殊ことにうましなぞと口より出まかせに饒舌しゃべりちらせば、亭主、さらば一升まいらせむ、食いたまえと云う。その面つらつきいと真面目まじめなれば逃げんとしたれども、ふと思ひ付きて、まず殻からをとりてたまわれと答える。亭主噴飯ふきだして、さてさておかしきことを云う人よと云う。おかしきはこれのみならず、余は今日二時間ばかりにて十五里歩

みぬ、またおかしからずやと云えば、亭主、否々、吾等われらは老たれども二時間に三十里はあゆむべしと云う。だんだん聞くに六町一里にて大笑いとなりぬ。昼めし過ぎて小繫こつなぎまではもくらもくらと足引の山路いとなぐさめ難く、暮れてあやしき家にやどりぬ。きのこずくめの膳部ぜんぶにてことごとく閉口す。

十六日、朝いと早く暗き内に出で、沼宮内ぬまくないもつつと抜けて、

一里ばかりにて足をいたため、一寸余りの長さの「まめ」三個できければ、歩みにくきことこの上なけれど、休みもせず、ついに洩しぶたみ

民の九丁ほど手前にて水飲み飯したため、涙ぐみて洩民に入りぬ。

盛岡もりおかまで二十銭という車夫あり、北海道の馬より三倍安し。

ついにのりて盛岡につきぬ。久しぶりにて女子らしき女子をみる。

一体土地の風俗温和にていやしからず。中学は東京の大学に似れど、警察署は耶蘇^{やそ}天主堂に似たり。ともかくも青森よりは遙^{はる}によろしく、戸数も多かるべし。肴^{さかなまち}町十三日町賑^{にぎわ}い盛なり、八幡^{ちまん}の祭礼とかにて殊^{ことさら}更なれば、見物したけれど足の痛さに是非^ひもなし。この日岩手富士を見る、また北上川の源に沼宮内より逢^あう、共に奥^{おうしゅう}州にての名勝なり。

十七日、朝早く起き出でたるに足傷^{いた}みて立つこと叶^{かな}わず、心を決して車に乗じて馳^はせたり。郡^{こおり}山^{やま}、好地^{こうち}、花巻^{くろさわじり}、黒沢尻^{くろさわじり}、金が崎、水沢、前沢を歴^へてようやく一ノ関に着す。この日行程二十四里なり。大町なんと相応の賑^{にぎわ}いなり。

十八日、朝霧^{あさぎり}いと深し。未明狐禅寺^{こぜんじ}に到り、岩手丸にて北^{きたか}

上^みを下る。兩岸景色おもしろし。いわゆる一山飛^{とん}で一山来るとも云うべき景にて、眼忙^{いそが}しく心ひまなく、句も詩もなきも口惜^{くちお}しく、淀^{よど}の川下りの弥次よりは遥かに劣れるも、さすがに弥次よりは高き情をもてる故なるべしとは負惜^{まけお}みなり。登米^{とよま}を過ぐる頃、女の児餅^{こもち}をうりに来る。いくらぞと問えば三文と答う。三毛かと問えばはいと云い、三厘かといえはまたはいと云う。なおくどく問えば怫然^{ふっぜん}として、面ふくらかして去る。しばらくして石の巻に着す。それより運河に添^{のびる}うて野蒜に向いぬ。足はまた腫^はれ上りて、ひとあしごとに剣をふむごとし。苦しさ耐^たえがたけれど、銭はなくなる道なお遠し、勤^{ごん}という修行、忍^{にん}と云う觀念はこの時の入用なりと、齒^{くいし}を切つてすすむに、やがて草鞋^{わらじ}のそこ抜けぬ。小

石原にていよいよ堪^たえ難きに、雨降り来り日暮るるになんなんと
 り。やむをえず負^くえる靴をとりおろして穿^うち歩むに、一ツ家のわ
 らじさげたるを見当り、うれしやと立寄り一ツ求めて十錢札を与
 うるに取らず、通用は近日に廃^{はい}せらるる者ゆえ厭^{いと}い嫌^{きら}いて、この
 村にては通用ならぬよしの断りも無理ならねど、事情の困難を話
 してたのむに、いじわる婆^{ばあ}めさらに聞き入れず。なくなく買わず
 にまた五六町すぎて、さても旅は悲しき者とおもいしりぬ。鴻^{こうが}
 雁^ん翔^{しょう}天^{てん}の翼^{つばさ}あれども棚^く々の捷^{しょう}なく、丈夫^{じょうふ}千里の才^{さい}あつて
 里^り閭^{りよ}に榮^{すく}少^{すくな}し、十錢時にあわず銅貨にいやしめらるなぞと、むず
 かしき愚痴^{ぐち}の出所はこんな者とお氣が付かれたり。ようやくある
 家にて草鞋を買いて勇^{ふる}を奮^{ふる}い、八時半頃^{のびる}野蒜につきぬ。白魚の

子の吸物すいものいとうまし、海の景色も珍めずらし。

十九日、夜来の大雨ようよう 勢いきおい 衰おとろ えたるに、今日は待ち

に待ちたる松島見んとて勇氣も日頃にましぬ。いでやと毛布ケット深く

かぶりて、えいさえいさと高城にさしかかれば早や海原うなばらも見ゆ

るに、ひた走りして、ついに五大堂瑞岩寺ずいがんじ 渡月橋とげつき等うちめぐ

りぬ。乗合い船にのらんとするに、あやにくに客一人もなし。ぜ

ひなく財布さいふのそこをはたきて船を雇やとえば、ひきちがえて客一人あ

り、いまいましきことかぎりなし。されどおもしろき景色にめで

て煩惱ぼんのうも軽きはいとよし。松島の景といえばただただ、松しま

やああまつしまやまつしまやと古人もいしいのみとかや、一ツ一

ツやがてくれけり千松島とつらねし技倆ぎりょうにては知らぬこと、わ

れわれにては鉛筆えんぴつの一ダース二ダースつかいてもこの景色をい
 い尽し得べしともおもえず。東西南北、前後左右、あるいは大あ
 るいは小、高きあり、ひくきあり、みの亀がめの尾おひきたるごとき者、
 臥ふしたる牛の首あげたるごとき者あり、月島星島桂島かつらじま、踞きよせ
 るがごときが布袋島ほていじまなら立てるごときは毘沙門島びしゃもんじまにや、勝手
 に舟子かこが云いちらす名も相応に多かるべし。松吟庵しょうぎんあんは閑かんにし
 て俳士髭はいしひげを撚ひねるところ、五大堂は寂さびて禅僧ぜんそう尻しりをすゆるによし。
 いわんやまたこの時金風漸せきせき々として天に亮り々よりうりようたる琴声きんせいを
 聞き、細雨霏々ひひとして袂たもとに滴てきてき々たる翠露すいろのかかるをや。過する者
 は送るがごとく、来きたるものは迎むかうるに似たり。赤き岸、白き渚なぎさあ
 れば、黒き岩、黄なる崖がけあり。子美太白しびたいはくの才、東坡柳州とうぱりゆうしゆうの筆

にあらずはいかむかこの光景を捕捉ほそくしえん。さてそれより塩竈しおがま
神社にもうでて、もうこの碑ひ、壺つばいの碑前しづみを過ぎ、芭蕉ばしやうの辻つじにつ
き、青葉の名城は日暮れたれば明日の見物となすべきつもりにて、
知る人もとの許に行きける。しおがまにてただの一銭となりければ、
そを神にたてまつりて、

からからとからき浮世うきよの塩釜しおがまで

せんじつめたりふところの中

はらの町にて、

みやぎの
宮城野の萩はぎの餅もちさえくえぬ身の

はらのへるのを何と仙台

二十日、朝、曇くもり。午前九時知る人をたずねしに、言葉の聞き
ちがえにて、いと知れにくかりければ、

いそがずはまちがえまじを旅人の

あとよりわかる路次のむだ道

二十一日、この日もまた我が得べき筋の金を得ず、今しばらく
待ちてよとの事に逗とまり留ゆうと決しける。

二十二日、同じく閑窓かんそう読書の他なし。

二十三日、同じく。

二十四日、同じく。

二十五日、朝、基督教キリスト教会堂に行きて説教をきく。仏教もこの

教も人の口より聞けば有難ありがたからずと思ひぬ。

二十六日、いかなしけん頭痛はげ烈しくしていかなともしがたし。

二十七日、同じく頭痛す。

二十八日、少許すこしの金と福島までの馬車券とを得ければ、因いんじゆ

循ん日を費さんよりは苦しくとも出発せんと馬車にて仙台を立ち、

日なお暮れざるに福島に着きぬ。途中白石の町は往時むかし民家の二階立てを禁じありしとかにて、うち見たるところ今なお巍然ぎぜんたる家

無し。片倉小十郎は面白き制を布しきしものかな。福島にて問ただい質すに、郡山より東京までは鉄路すで既に通じて汽車の往復ある由よしなり。その乗券の価を問うにほとんど囊中有るところと相同じければ、
今宵こよいこの地に宿りて汽車賃を食い込み、明日また歩み明後日また歩み、いつまでも順送りに汽車へ乗れぬ身とならんよりは、苦しくとも夜を罩こめて郡山まで歩み、明日の朝一番にて東京に到らん方極めて妙みょうなり、身には邪熱じゃねつあり足はなお痛めど、夜行をとらでは以後の苦みいよいよもつて大ならむと、ついに草鞋穿わらじばきとなりて歩み出しぬ。二本松に至れば、はや夜半ちかくして、市は祭礼のよしにて賑やかなれど、我が心の淋さびしさ云うばかりなし。市を出はざる頃より月明らかに前途ゆくてを照しくるれど、同伴者つれも無

くてただ一人、町にて買いたる餅もちを食いながら行く心の中いと悲しく、錢あらば錢あらばと思いつつようよう進むに、足の疲れはいよいよ甚しく、時には犬に取り巻かれ人に誰すいか何せられて、辛からくも弘あけがた曉郡山に達しけるが、二本松郡山の間にては幾度いくどか憩いこいけるに、初めは路の傍かたわらの草あるところに腰こしを休めなどせしも、次には路央みちなかに蝙蝠傘こうもりがさを投じてその上に腰を休むようになり、ついには大の字をなして天を仰ぎつつ地上に身を横たえ、額を照らす月光に浴して、他年のたれ死をする時あらば大抵たいていかかる光景ならんと、悲しき想像などを起すようなりぬ。

二十九日、汽車の中に困こんもん悶わづして僅かに睡ねむり、午後東京に辛からくも着きぬ。久しく見ざれば停車場より我が家までの間の景色さえ

変りて、そうぜん 愴然たる感いと深く、父上母上の我が思いなしにやい
 たく老いたまいたる、祖母ばばうえ上のこの四五日前より中風とやらに罹か
 りたまえりとて、身動きも得したまわず病びようじよく 蓐の上に苦しみ
 たまえるには、いよいよ心も心ならず驚おどろき悲しみ、弟妹等の生長
 せるばかりにはやや嬉うれしき心地すれど、いたずらに齡よわいのみ長じて
 よからぬことのみし出いだしたる我が、今もなお往時むかしながらの阿蒙あもうな
 るに慚愧ざんきの情身を責せむれば、他を見るにつけこれにすら悲しさ増
 して言葉も出でず。

（明治二十年八月）

青空文庫情報

底本：ちくま日本文学全集『幸田露伴』 筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第一刷

親本：「ちくま文学の森」筑摩書房

入力：真先芳秋

校正：丹羽倫子

1998年9月16日公開

2003年11月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

は、w.aozora.gr.jp）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

突貫紀行

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>